



特集

音楽のつながり手たち

vol.
034
2023

特集

音楽のつなぎ手たち



a.



b.

レポート1

音楽スペース「おとむすび」

音楽とみんなとサンデー～はじめの一步～

地域と音楽に触れられる機会

横浜市泉区の中田駅出口からすぐの場所にある音楽スペース「おとむすび」。扉を開けると、カフェと音楽スペースからなる居心地のよい空間が広がっていた。音楽ワークショップやコンサート、認知症カフェやコミュニティカフェなどが開かれ、地域で愛されている場所だ。

オープンのきっかけは代表の小柳玲子さんが音楽療法士として病院や福祉施設で音楽を届けるなかで聞いた声にあった。「施設では音楽にふれられたのに、地域に戻ったら音楽を続けられる場所がなかなか見つからない」。そんな現状を知り、病気や障害の有無にかかわらず音楽を楽しめて、地域との接点をもてる場が必要だと思った小

柳さん。同じ思いを持つ仲間を集め、クラウドファンディングに成功した。2019年のオープンから現在まで、地域の人と共に音楽スペース「おとむすび」を育ててきた。

「やってみたい」を実現できる場

そんな「おとむすび」は今年度「企画伴走プロジェクト スプラウト」という新たな試みをしている。これは地域の人からの「イベントを企画したいけどハードルが高く開催に踏み切れない」という声から生まれた企画だ。「おとむすび」がそれぞれの「やってみたい」という思いを聞き、実現に向けた準備から当日までサポートする。

今年度は鍵盤ハーモニカの魅力を再発見する企画や趣味で続けてきた弦楽器・ライヤーによるクリスマスコンサート、本の世界を演じるワークショップなどが集まった。取材の日は「音楽とみんなとサンデー～はじめの一步～」が開催された。この企画は、特別支援学校卒業生の母親からの

横浜のまちで人や場所を

音楽でつなぐみなさんにお話をお伺いしました。

レポート1 音楽スペース「おとむすび」

レポート2 まちなか立寄楽団

レポート3 しましまのおんがくたい



d.



c.

- a. 代表・小柳玲子さん
- b. イベントのようす
- c. イベントのようす
- d. おとむすび外観

提案で始まったという。

「学校を卒業して平日は作業所で働いていても休日に出かけられる場所がない。友だちと遊ぶにもひとりでは不安だけど、親のいない場所で友だちと気兼ねなく遊べる場所をつくりたいという思いから生まれました」。

会場には特別支援学校の卒業生だけでなく、地域の人やボランティアも一緒に音楽を楽しんだ。好きな歌をみんなで聴いてみたり、いっしょに踊ってみたり、楽器を奏でてみたり。あつという間の3時間。参加者は音楽が好き!という気持ちにあふれていた。踊り疲れてぐったりするほど、全身で楽しむようすが印象的だった。

ステップアップだけでない音楽の楽しみ方

小柳さんは「今日来てくれた子たちは音楽の楽しみ方をよくわかっているなあと思います。人によっては音楽をハードルの高いものだと感じているかもしれませんが、それは音楽をやる＝うま

くできるようになるというイメージによるものだと思います。楽器のレッスンなどで次々にステップアップを目指すと途中で挫折してしまう人も多くいます。でも、それはもったいないと私は思っています。曲を上手に奏でることだけが音楽ではありません。あらかじめ自分がもっている力で十分に楽しめるんです。そんなふうに音楽を楽しめる場が少ない現状ですが、『おとむすび』から広げたいです」と音楽のあり方に真摯な目線で問いかけた。これからは障害があるかどうかのグレーゾーンにある人や、自立して見えても実はフォローが必要な人にもリーチしたいという。

地域の人と人、人と音楽を結んできた「おとむすび」。その結び目が地域の人たちに育てられ、新たな芽を出している。

音楽スペース「おとむすび」
<https://www.otomusubi-yokohama.com/>
神奈川県横浜市泉区中田東3丁目2-13

まちなか立寄楽団

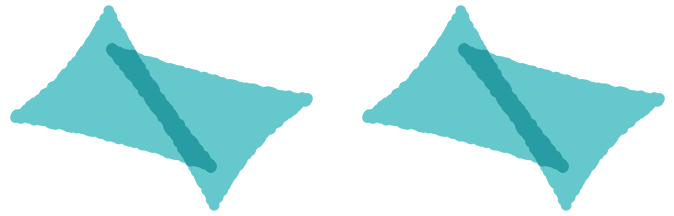
たちよってつくるコンサート2022

歌と共にあるまち

「まちなか立寄楽団」は、誰でもふらっと立ち寄れる音楽の場をつくりたいという思いから2020年に生まれたグループだ。横浜の簡易宿泊所が集中する地域にある寿町健康福祉交流センターを拠点に活動し、今年度はコンサート開催に向けて、夏から定期的に音楽ワークショップを開いた。「まちなか立寄楽団」の立ち上げの中心となったのは岩崎佐和さんと長澤浩一さん。岩崎さんは生物学の研究をする傍らで続けている音楽活動をきっかけに寿町を訪れ、長澤さんと出会った。長澤さんはこのまちに暮らして22年。自身を労働者と名乗り働くほか、イベントのとりまとめや、音楽や踊り、イラストなどの表現活動も行う。岩崎さんは「性別も年齢も違いますが音楽を通して出会って意気投合しました。今では10年来の友人です」という。このふたりが共通して感じているのは、寿町は音楽と共にあるまちだということ。長澤さんは「自分も含め、苦労してこのまちにたどり着いた人にとって音楽はかけがえのない支えです。歌には人に寄り添う力があります」と語った。

音楽が居場所になる

この活動の集大成として開かれたのが「たちよってつくるコンサート2022」。コンサートはワークショップで生まれたオリジナル曲から定番の曲までバラエティに富み、会場は大盛り上がり。終演後もメンバー含む参加者がその場にとどまり、セッションしたり、おしゃべりしたりと熱気が冷めなかった。「気負いせずに参加できて楽しかった」という声も聞かれ、長澤さんは「きっちりするよりも肩の力を抜いて余白をつくるのが大事ですね。それがみんなが自由に過ごせる居場所につながると気づきました」と活動を振り返った。岩崎さんは今後の展開について「地元の歌を心の支えに



している人も多いと聞きます。その歌を教えてもらうなど相互的なやりとりがしたいです」と語った。まちの内側と外側の両方の視点がほどよく混ざり合い居心地のよさをつくる、音楽による居場所が生まれていた。



a.



b.



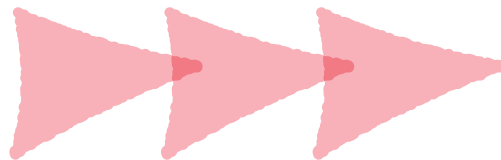
c.

- a. 開演前、メンバーが音楽を奏でながらまちを練り歩くようす
- b. 本番のようす(岩崎さん=右から2人目、長澤さん=左から2人目)
- c. 終演後、セッションのようす
(後ろにはオリジナル曲「ともに働くフューチャー音頭」の歌詞が)

まちなか立寄楽団

<https://www.facebook.com/machinakatachiyori>

しましまのおんがくたい マイ楽器で音を鳴らしてみよう



互いの音を聞きあって

神奈川県立あおば支援学校の体育館に「しましまのおんがくたい」のメンバーがトレードマークのしま模様の衣装に身を包み、太鼓を叩いたり管楽器を吹いたりしながらやってきた。今日は「マイ楽器で音を鳴らしてみよう」開催の日。管打楽器の豊かな音色とともに、生徒たちも手づくりの楽器を鳴らし、互いの音を聞きあう。ノリノリで踊ったり、静かに耳を傾けたりとそれぞれが自分のペースで楽しんだ。

「しましまのおんがくたい」は、これまで青葉区民文化センター フィリアホールを中心に0歳からの子どもと保護者に向けたワークショップ形式のコンサートを開催してきたが、2021年からフィリアホールの地域コーディネーター 中島直子さんの紹介であおば支援学校での取り組みを開始。現在では放課後等デイサービスなどにも活動の場を広げている。サクソフォン担当の木村有沙さんは今後の展開について「音楽を通して地域の人とあおば支援学校の生徒たちが会える場をつくりたいです」と意気込みを見せた。

コーディネーターと演奏家が共に歩む

木村さんは中島さんについてこのユニットの親のような存在だと語る。「私たちはフィリアホール主催企画の出演者として集められたメンバーでした。そこで中島さんが子どもが泣いても動いてもいいコンサートを開催したいと話してくださったんです。ふだんは演奏だけを求められることが多く、お客さんとコミュニケーションを取りながらの進行は慣れていませんでしたが、中島さんからアドバイスをもらい試行錯誤を繰り返しました。する

と終演後に感激して泣きながら感想を伝えてくれる方も現れて、音楽が届いている、必要とされているという実感を強く持ちました。やがて自分たちでもこんな場を開きたいとユニットを立ち上げたんです」。中島さんは「演奏が上手なだけでなく、そこにいる人の状況に寄り添って音楽を届けられる人はなかなかいません。細やかに目を向けながらその場の状況に対応できる『しましまのおんがくたい』が、とても頼もしいです」と微笑んだ。地域コーディネーターが演奏家を育てて地域につなぎ、演奏家が音楽で地域の人をつなぐ。そんな文化と地域の循環が見えてきた。



a.



b.

a. あおば支援学校の生徒たちからのプレゼントを手にする
「しましまのおんがくたい」のメンバー
b. 「マイ楽器で音を鳴らしてみよう」で使用された手づくりの楽器

しましまのおんがくたい
<https://shima-on.com/>

音楽というと演奏のテクニックが必要なイメージもあるが、決してそれだけではない。一つでも音を出せたら、声を出したら、手を叩けば、それが音楽になること。そして同じ時間の中を過ごすことができること。横浜のまちには、そんな音楽の秘密をそっと教えてくれる人たちがいる。音楽の場をつくる力、そして人に寄り添う力に可能性を感じた。

テーマ

森、都市、路上～生きる場所と身体の相互関係～

ゲスト

奥野克巳（立教大学教授、文化人類学者）
アオキ裕キ（新人H ソケリッサ! 主宰、アオキカク代表、ダンサー・振付家）

聞き手・進行

小川智紀（ヨコハマアートサイト事務局）

収録日時

2022年12月6日(火)

場所

横浜中華街「廣東會館俱樂部」(YPAM 会場)およびオンライン

今回のラウンジは東南アジア・ボルネオ島の森の民「プナン」のフィールドワークを行う人類学者の奥野克巳さんと、路上生活経験者で構成されるダンスユニット「新人Hソケリッサ!」主宰のアオキ裕キさんをゲストに迎え、環境と身体の関係についてお話を伺いました。

奥野さんはプナンの人たちの生き方を語りました。現代社会を生きる人は人生の中で生きがいや目標を見出し、失敗や成功をしながら生きていく。しかし食べ物を探し、食べることを繰り返す、まさに「生きるために食べる」人たちがプナンにはいて、そこには未来への目標を仮定する概念がないということ。ここには未来や目標とは本来に必要なものなのかという、私たちの生き方への根本的な問いかけがあるのではないかと奥野さんは考えます。また排泄行為を通じたコミュニケーションについて紹介し、その身体性にも迫りました。

アオキさんはソケリッサのこれまでについて語りました。以前はコンサートやCMなどでバックダンサーをしていたアオキさん。あるとき、ストリートミュージシャンの横

でお尻を出して寝ている路上生活者との出会いをきっかけに、彼らの身体性をダンスで表現できないかと考えるようになり。その後、支援団体などの協力を得ながら人を集めワークショップを開催しました。アオキさんはどうすれば彼らにやりたいことを伝えられるか、信頼してもらえるか、そしてそれを観客に伝えられるか、とても悩みながら対話と稽古を重ねます。そして2007年、第一回公演を開催。その後も全国各地で活動を続け、2020年には彼らの活動を追ったドキュメンタリー映画も公開されました。

ディスカッションでは、路上生活とプナンの環境は単純に比較できないという前提はあるが、役割に人を当てはめる現代社会のあり方に問いを立て、人間の本来もっている身体性や生活からその糸口を探しているという互いの共通点を見出しました。



ラウンジのようす（左から、奥野克巳さん、アオキ裕キさん、小川智紀）



左：福祉施設で作品製作のようす
右：交流会「さかいとあーと井戸端かいぎ」のようす（ストレッチ中）

～芸術文化は人と人をつなぐコミュニケーション～

寄稿：川那辺 香乃

大阪府堺市の文化状況について、
堺アーツカウンシルのプログラム・オフィサーである川那辺香乃さんが語ってくださいました！

堺アーツカウンシルは2021年1月に生まれました。詩人の上田假奈代を始め多彩なメンバーが集まり、子育てや教育、福祉、観光などの分野と連携し、堺の芸術文化を育む活動をしています。

「もの始まりなんでも堺」というように、港町として栄えた大阪府堺市の芸術文化はとても豊かです。千利休、与謝野晶子の生誕地としても有名です。

また、堺市内には個人所有の能楽会館があります。堺に能楽堂がなかったことから、1969年にかつて酒蔵を営んでおられた方が建てたもので、雑居ビルの中に入ると総檜造りの能楽堂が眼前に現れるのです。私は以前、こちらでジャワ舞踊を拝見したのですが、ジャワの音楽や衣装、動きが能楽堂ととても合っていて、昔から海外の文化を積極的に受け入れてきた堺ならではの公演だと思いました。

そのほかにも、障害者の作品製作を子どもがサポートする活動もあります。主催の方はアトリエ教室を営んでおられるのですが、子どもだけでなく大人や障害者、高齢者にも作品づくりを楽しんでほしい、そしてふだん会うことのない人同士がつながる機会も創出したいという想いを持ち事業を展開されています。

現在、さまざまな地域でアーツカウンシルが設立されていますが、それよりもっと前から草の根で活動している方々がいます。堺アーツカウンシルでは、そうした方々とこれからの芸術文化を考えていくために、テーマを決めてざっくばらんに話しあう交流会や、補助金の書き方や仲間のつくり方といった勉強会を実施しネットワークづくりに力を入れています。「アーツカウンシル」というなじみのない言葉に戸惑う方も、対話を重ねることで少しずつ理解を深めてくださっているように思います。

地域の芸術文化活動をより広げていくには、コミュニケーションを絶やさないと。まずは堺の商人たちのように、なんでも受け入れてみることから始まるのかもしれない。



川那辺 香乃

かわなべ かの 堺アーツカウンシル プログラム・オフィサー

学校教育現場でのアートワークショップのコーディネートやアートプロジェクトのディレクションを専門とする。そのほか、社会課題をテーマにした地域研究者とのワークショップ、障がい者とともに表現を模索する研究会などにも携わる。最近ではアートプロジェクトの全国ネットワークづくりにも奔走中。NPO法人子どもアーティストの出会いプログラムディレクター。NPO法人アートNPOリンク理事。アート・アンド・ネットワーク コレクティブ代表。

事務局うろうろ日記



ヨコハマアートサイト事務局は、今日も横浜市内の
あっちこっちへうろうろしています。



11月7日木曜日

都筑アートプロジェクトによるアート展「WeLoveYou～周縁からの発信」へ。長津田駅に隣接した緑区民文化センターみどりアートパークを中心に、田園風景に佇むArtspace赤い家や、CaféMonの店内と中庭にアート作品が展示されていた。アートに出会い、まちを歩きながら今という時代を考える。

12月6日金曜日

ティーンズクリエイション展2022「WakamonoArtsFestival」を見に栄区民文化センターリリスへ。横浜市内外の十代から公募した幅広いジャンルの作品が展示されていた。若者たちが協働して作りあげた作品も、自己対話の中でつくられたことが感じられる作品も、同じ空間で輝いていた。



1月15日日曜日

toRmansionによるベイビーシアター「風のみた夢」をSTスポットで。2～14ヶ月の乳幼児と大人に向けた本作品。ほの暗い空間には布や木などで作られたオブジェが配置され、自由に触れることができる。出演者によるパフォーマンスが始まると、参加者は不思議な体験にいざなわれた。ひとときの非日常。

3月1日水曜日

ヨコハマアートサイト2023の募集を開始しました。2023年度もヨコハマアートサイトは横浜の地域文化を支えるアート活動を応援します。みなさま、ぜひご応募ください。募集期間は3月1日(水)～4月5日(水)です。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

横浜のアート活動を応援する助成金

ヨコハマアートサイト
Yokohama Art Site

申請受付期間
2023年 **3/1(水) - 4/5(水)**

ヨコハマアートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決にアプローチする文化芸術活動、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動、ヨコハマの個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局（認定NPO法人 STスポット横浜、横浜市文化観光局）
〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル B1F（認定NPO法人STスポット横浜 地域連携事業部内）
TEL:045-325-0410 FAX:045-325-0414 MAIL:office@y-artsite.org <https://y-artsite.org>

@Y_Artsite ヨコハマアートサイト ヨコハマアートサイトに関するを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト vol.034

発行：ヨコハマアートサイト事務局 編集：認定NPO法人 STスポット横浜 編集協力：大谷薫子 取材・テキスト：小川智紀、森崎花、田中真実
デザイン：小池佑子 撮影(表紙・特集1)：金子愛帆 印刷・製本：共進印刷株式会社 発行日：2023年3月31日
季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。